

二〇二三年度A

小論文 (60分)

〈注意〉

- 一、開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- 二、小論文用紙は、2枚配布されます。どちらか1枚を提出しなさい。
- 三、提出する小論文用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入しなさい。
- 四、提出する小論文用紙の冒頭にある所定欄に、○印を付けなさい。

受験番号			

【問】傍線部「『励まし言葉』という問題」とありますが、どういうことですか。本文の内容を踏まえて説明してください。

また、筆者の主張に対するあなたの考えを述べてください。なお、字数は六〇〇字とします。

【時間六〇分】

人を励ます言葉って何だろう。そもそも、言葉で人を励ますことはできるのか。なんてことを考え出したのは、二〇一一年の東日本大震災がきっかけだった。

あの頃、テレビや新聞では連日、東北地方の深刻な状況が報じられていた。大津波の圧倒的な威力。人間のコントロールを超えて暴走した原子力発電所。身も心も傷つき疲れ果てた人たち。画面に写る被災地の様子は、文字通り筆舌に尽くし難いものだった。

言葉というものはなんて無力なんだろう。いや、言葉を仕事にしているにもかかわらず、こうした災害に対して何も言えないでいる自分は、なんて卑小な存在なんだろう。そうした猛烈な無力感に囚^{とら}われた。

それでも、せめて言葉について考えることは諦めたくなかった。だから、とにかくぼくは目を凝らし、耳を澄ませた。

こうした非常時には、どんな言葉が飛び交うのか。非常時という極限状況は、ぼくらの言葉にどんな影響を及ぼすのか。そうした問題を確かめておきたくて、日々、目に映る文字、耳に入る声を必死にかき集めていた。

そこでぼくが気になったのが、「励まし言葉」という問題だった。

震災直後、テレビのコメンテーターも、公共のCMも、いろいろと手探りで「励まし言葉」を模索していた気がする。

きつと、あの時、多くの人が「被災者の力になりたい」「励ましたい」と願ったことだろう。でも、「がんばれ」なんてありきたりな言葉は、被災者に対して失礼な気がする。励ましたいけど、傷つけたくない。そんな葛藤からだろうか、みんな慎重に、あるいは怖々と、言葉を選んでいたように思う。

あれからずっと、モヤモヤと考え続けてわかったのは、どうやらぼくらが使う日本語には「純粹に人を励ます言葉」というものが存在しないらしい、ということだった。

『ヘヴン』という小説がある。川上未映子^{かわかみみよこ}さんが書いた名長編で、中学生の壮絶な「いじめ」がテーマになっている。

この作品の中に、加害者と被害者が一対一で話し合う場面がある。いじめられている主人公が、ばったり出会った加害者グループの一人を捕まえて、勇気を振りしぼって話しかけるとい場面だ。主人公は震える声で問いかける。どうして君たちは、ぼくに対して、こんなひどいことができるんだ、と。

ネタバレになるから詳しくは書かないけれど、結論から言うと、主人公は加害者の男子生徒にコテンパンに言い負かされる。その言い負かされ具合があまりにも圧倒的で、読んでいて悲しくなったり、腹が立ったり、とにかく感情がぶれにぶれて、正直、読むのがしんどい場面だ。

実は、ぼくは授業や講演の中で、ときどきこの小説を採り上げてワークショップを開く。そして参加者に短い作文を書いてもらう。テーマは「いじめられている子を励ます」というものだ。

すると多くの参加者は、「いじめられる側」に同情し、「いじめる側」を許せないと怒る。本当にメラメラと怒りの炎が見えるくらいにヒートアップする人もいる。

でも、提出された作文を読むと、だいたい六割から七割近くの方は、「いじめる側」の肩を持つ（この比率はぼくの経験値によるもの）。正確に言うと、理屈としては「いじめる側」が言っていることに近い文章を書いてくる。心情的には「いじめられる側」に同情していても、出来上がる文章は「いじめる側」に近くなるのだ。

どうしてこんなことが起きるのか。たぶん、「言葉がないこと」が関係している。

「人を励ます言葉」というと、どんなフレーズを思いつくだろうか。

ワークショップで出てくる不動のトップ3は「がんばれ」「負けるな」「大丈夫」。他にもいろいろ出るけど、この三つの地位が揺

らぐことはない。

でも、よくよく考えると、「がんばれ」と「負けるな」は、人を叱りつける時にも使う。「叱咤激励しったげきれい」という四字熟語があるように、日本語では「叱咤」と「激励」はコインの表裏の関係にある。

一方、「大丈夫」というのも、最近では「no thank you」の意味で使われることが多い。「コーヒーもう一杯飲みますか?」「あ、大丈夫です」といった感じだ。

ほくらが「励まし表現」の代表格だと思っている言葉は、時と場合によっては、「人を叱る言葉」や「人と距離をとる言葉」に姿を変える。どうやら日本語には、「どんな文脈にあてはめても、『人を励ます』という意味だけを持つ言葉」というのは存在しないらしい。

ワークショップでも、「いじめられる側」に同情する主旨で書きはじめられた文章が、後半に進むにつれて「こんな奴に負けないでがんばれ」という論調になっていくパターンが多い。

これは裏返すと、「自分を強く持て」ということなんだけど、受け取り方によっては、「いじめられるのはあなたが弱いからいけない」というメッセージにもなる。

「弱いからいけない」——実はこれ、課題小説の中で「いじめる側」が言ってる理屈と、ほとんど同じなのだ。

いまから振り返ってみれば、東日本大震災というのは、普段ほくらが使っている「励まし言葉」ではまったく対応できない事態だったのだろう。

ひたすら堪え忍ぶ被災者に「がんばれ」は相応ふさわしくない（もう限界までがんばっていた）。「負けるな」というのも変だ（被災に「勝ち負け」は関係ない）。「大丈夫だよ」もおかしい（実際「大丈夫」ではなかった人たちがたくさんいた）。

そうこうしているうちに、どこからともなく「ひとりじゃない」というフレーズが出回るようになった。被災者を孤立させず、連帯しようという思いを込めた新しい「励まし言葉」だったと思う。

でも、これも使い方次第では「苦しいのはあなただけじゃない（だからガマンしよう）」という意味になりえてしまう。

多くの人に向けられた言葉は、どうしても編み目が粗くなる。一口に「被災者」といっても、実際にそこにいるのはさまざまな事情を抱えた一人ひとりの人間だ。だから、ひとつの言葉が全員の心にぴたりと当てはまるなんてことがあるはずない。「その言葉は今の心情にそぐわない」という人がいれば、そのたびに言葉を探すことが必要だ。

もちろん、震災は言葉だけでなんともかなる問題じゃない。だからといって、言葉は二の次でいいわけでもない。

さっきのワークショップで気づいてほしいのは、「どんな場面でも人を励ませる便利な言葉なんてない」ということ。そんな「ドラえものの秘密道具」みたいな言葉は存在しない。

でも、不思議なもので、ぼくたちは普段から「誰かの言葉に励まされる経験」をしている。やっぱり「言葉が人を励ます」ことは確かにあるのだ。

だから、「言葉は無力だ」と絶望することはない。言葉を信じて、「言葉探し」を続けたらいい。

【出典】荒井裕樹『まとまらない言葉を生きる』（柏書房、二〇二一年）三二―三七ページより

